

南都仏教

平岡昇修

2016年3月2日

1 南都仏教のあらまし

南都仏教とは奈良時代に中国仏教の影響を受けて平城京周辺に盛んとなった仏教で、学派仏教とも考えられ、平安・鎌倉時代の祖師仏教とはおもむきを異にしている。大安寺、元興寺、興福寺、東大寺、法隆寺はすべて渡来した高僧を招いてその中心を仏教学の研究においていた。

奈良時代の『伽藍縁起並びに流記資材帳』によれば大安寺では修多羅衆、三論衆、撰論衆、華嚴衆、涅槃衆、元興寺では成実衆、三論衆、撰論衆、法隆寺では律衆、三論衆、唯識衆等の学問をするためのグループが結成されたが、決して一宗一派にこだわるものでなかった。

そこでは成唯識論、俱舍論、百論、十二門論、中論、戒律、華嚴経、法華経が研究されていて、僧侶は各自住まいする本寺は定まっていたけれども、学問のため他の寺を訪問することは自由とする学問寺の形体を備えていた。平安時代に僧侶の身分や学風を示す際に同時に所属している寺院名を付して「法相宗東大寺」「真言宗東大寺」と称していたのは東大寺に住まい法相宗を学び、真言宗を学んでいるということの意味している。学派仏教を中心としている南都仏教では、宗よりも寺院の方が重要な意味を持っているのであって平安・鎌倉仏教が寺院よりも祖師を重視するのは対照的である。

1.1 南都仏教の歴史

当時の日本人は、入唐した留学僧が仏教教学の最も新鮮なものを持ち帰るべきであるという信念にもとづいて、玄奘三蔵がインドより帰ったのち最も盛大を極めていた法相宗を直ちに受容することにつとめた。そこに法相宗より始まる南都仏教が興ったのである。

しかし平安時代になると南都仏教にも批判の声が挙がる。

最澄は南都仏教を見直すために、また自分の立教開宗を意義づけるためにも聖徳太子をたたえのちに天台宗を広めたのである。空海は、南都の戒律を攻撃せず三昧耶戒（さんまやかい）のなかに戒を組み入れ、自分自身東大寺別当になって南都仏教と融和をはかって、かえって南都仏教を受容して南都寺院を真言化することに成功した。その結果、東大寺や法隆寺は真言化していった。

鎌倉時代になり、興福寺の解脱上人貞慶、高山寺の明恵上人高弁は浄土宗を攻撃したけれども、親鸞聖人等は聖徳太子を信仰して、その新しい南都における仏教思想との融和をはかって自己の立場を強固にしようとしている。南都仏教は決して奈良仏教にとどまらず日本仏教全体に大きな影響を与え、東大寺の宗性は『日本高僧伝要文抄』を、また凝然は『八宗綱要』、『三国仏法伝通縁起』等を著して、日本仏教のあり方を示した。

1.2 奈良仏教の特質

飛鳥仏教は法隆寺を中心とする隋唐初期の仏教文化の吸収に積極的な意欲を示していたことに特徴があるが、奈良仏教の特徴は、仏教教学研究をたてまえとした学派仏教であるという点にある。国家的組織をふまえて建立された東大寺は、華嚴教学を中心として八宗兼学の立場をとり、藤原氏の氏寺として発展してきた興福寺は法相宗を、元興寺は三論宗を学ぶ寺として栄え、薬師寺、法隆寺はともに興福寺の支配下に属して法相教学の道場となり、唐招提寺は鑑真により律宗の道場となった。しかし、俱舎宗と成実宗は独立した寺院を得るにいたらず、法相・三論教学を学ぶための手段として単に兼学されるにすぎなかった。奈良仏教も東大寺華嚴の衰退後、平安時代には、弘法大師空海が南都に進出し東大寺別当となって真言化する傾向を帯び、鎌倉時代には、叡尊を中心として西大寺の復興につれて律宗と真言宗との合流となっていわゆる真言律宗という宗派が生まれた。江戸時代には、宝山湛海が生駒山に歓喜天を祀って真言律宗宝山寺を開いた。「生駒の聖天様」として有名な「歓喜天根本道場」である。

1.3 奈良仏教の教義と分派

奈良仏教は京都の平安仏教に対して南都仏教と、また南都六宗ともいわれている。隋の嘉祥大師吉蔵（549-623）が大成した三論宗、玄奘三蔵（600-664）がインドから唐に帰国してのち、その弟子となった慈恩大師窺基（632-682）が大成した法相宗、賢首大師法蔵（643-712）がうちたてた華嚴宗が奈良仏教教学の主流であった。成実宗は三論宗に吸収され、俱舎宗は法相宗に兼学され、深い仏教教学研究のための予備教学として用いられた。これに律宗を加えた三論・法相・華嚴・律の四宗が奈良仏教教学の中心となった。

1.4 律宗

宗とは、中心となる教学を意味する。律宗の本山は唐招提寺である。伝来は唐より道セン（702-760）が天平八年（736）に来朝して、『四分律行事鈔』を講じたのにはじまる。律学と授戒作法については、天平勝宝五年（753）日本に渡来した鑑真により伝えられた。律宗では四分律を重視し、比丘の受持すべき戒法として250戒をあげ、そのなかでも波羅夷は最も重い罪で姪・盗・殺・妄（自分の宗教上の段階を偽ること）の四種類があり、他は軽い罪に充当している。また、比丘尼の受持する戒法は比丘より多い341戒を数えている。これは、男性より女性のほうが罪深いという考え方に由来する。在家の信者は、戒も不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒を保てばいいと定めている。そして一般には十五歳以上の男女は出家を許されて沙弥、沙弥尼と称して、常に十戒を保つべきであることを約束されている。受戒の思想は、ただ戒律を守るのではなく保持しつづけると同時に守り抜くための自己の意志を確認することであり、一生涯を通じて受者の行為を規定づけることであった。この四分律戒を中心とする四分律宗は懷素の東塔宗・法礪の相部宗・道宣の南山宗に分かれて中国で発展したが、道宣は玄奘三蔵の訳場にも出入りした関係から、その唯識教学を受けて法相宗との親近性がみられた。戒律は四分律のほかに梵網經に説かれる十重禁戒がある。このように戒律は中国で組織され戒学も興隆したが、わが国においては唐の揚州江陽県に生まれ、十四歳で大雲寺の智満について出家し、道岸、弘景につかえて律および天台を学んだ鑑真が、揚州大明寺を去って、天平勝宝六年

(754) 東大寺に住まいし、戒壇を設けて聖武天皇や光明皇后に菩薩戒を授けるとともに、戒壇院を建てた。天平宝字五年(761)には下野国薬師寺、筑前国観世音寺にも戒壇が設けられた。また唐招提寺を給って律宗の開祖となった。

1.5 三論宗

この宗は日本に最初に伝わった仏教教学で、隋の嘉祥大師吉蔵の開いた宗である。中論・百論・十二門論という三論に基礎を置いている宗である。三論宗の中心思想は般若経に説かれている空の思想を基に形成されている。龍樹(りゅうじゆ)の提唱した八不中道を現わそうとしたのである。教義は、破邪(はじゃ)顕正(けんしょう)、八不中道(はつぷちゅうどう)、真俗二諦(しんぞくにたい)の考え方に基づいて成り立っている。破邪顕正とは正見を顕わすためには邪見を破壊すべきであるという考え方で、邪執(じゃしゅう)(正しくない執着心)を無くして正しい仏の道を知るために、そのとらわれたものにかかわらないということである。迷執(めいしゅう)(迷った心で物事に執着すること)を破壊してこそ仏の真理を見極めることができるのである。八不中道とは、龍樹の著した『中論』の巻頭の偈に述べている。八不とは生・滅・常・断・一・異・出・来で示されるこだわりの心をもつという迷執を破壊して、八つの迷いを払いのけたところにはじめて中道のありのままのすがたをみることができるという意味である。すなわち、この八不は破邪見の実践の立場として説明されているのである。真俗二諦は、空にとらわれる迷いを破ろうとするために、仏は俗諦(相対的さとり)の有(存在すること)を説いて、真諦(絶対的さとり)の空を述べようとしている。三論宗の立場では、生も否定し、滅も否定し、また否定そのものも否定したところにすべてのもののありのままの姿が現わされるのであると主張する。『百論』は外道を排斥することに目的をもち、大乘の義をのべ、『十二門論』では空の思想を十二に分けて説明し、一切皆空の思想を徹底的に説明し、大乘そのものを説明している。『中論』は『中観論』ともいい、中道の観法を説いて、主として小乗の教説をやぶり、外道の教理を排して大乘の真義を現わそうとしている。三論宗は嘉祥大師吉蔵が中心となって中国仏教の中で大きな教理的発展をとげたが、日本へは高麗僧の慧灌(えかん)が隋に留学して嘉祥大師より空宗(くうしゅう)を承けて、そののち推古天皇三十三年(625)、高麗王の命を受けて来朝し三論宗を宣布した。彼は第一伝といわれ、元興寺に住まい、そののち智蔵(ちぞう)が出て慧灌につき三論を学び法隆寺に住した。さらに智光(ちこう)・頼光(らいこう)もこの道を求めて元興寺流をなした。また、道慈は智蔵(ちぞう)に三論宗を、義(ぎ)淵(えん)に法相宗を学んで入唐し、吉蔵の法孫の元康より三論を親しく学んで善無畏の密教にも関心を示して、帰国後大安寺に住まい大いに活躍したので、奈良時代には大安寺と元興寺がその教学を学ぶ中心の寺院となったのである。そして平安時代には、理源(りげん)大師聖(しょう)宝(ぼう)が東大寺に東南院を創建し、三論宗の本拠とした。

1.6 成実宗・俱舎宗

奈良六宗のうちに成実宗と俱舎宗があったが、ともに一宗を形成する学問的体系を具えるにはいたらなかった。成実宗は三論宗に付属し、俱舎宗は法相宗に付して教義が学ばれたのである。成実宗は『成実論(じょうじつろん)』をよりどころとして、その論の名をそのまま宗の名としている。成実とは、仏の真実の教理を解釈成就することを目的としてつくられた論で、その論旨は人無我観、法無我観を説く。人無我観の立場では人間のもっている色・受・想・行・識の五蘊がすべて集

まって人間を形成し、人我が生まれているのであるが、この集まりの五蘊が分かれたなら人我もなくなってしまうのであり、人我という一定不変なものは実在するものでないとみるとともに、法無我観の立場からするならば、人我のもとになっている五蘊そのものもまた仮の名にすぎないと考える。これは、瓶の中に水が入っていないというだけでなく、瓶そのものも破れてしまえば瓶の形すら消滅するという理論と同様である。『成実論』は訶梨跋摩(かりばつま)の著で二十巻あり、鳩摩羅什(くまらじゅう)がこれを訳し、真俗二諦門をたてて俗諦門では諸法を五位八十四法に分け、真諦門では全く実有を否定して一切皆空を説いている。この世界全体は仮の現象に過ぎず、すべては空であると強調するのである。この宗はもともと中国の隋唐における十三宗の一つとして興ったのだが、日本では三論宗の付属として学僧の間に兼学して研究されたにすぎなかったために、ついに一宗を形成するには至っていないのである。俱舎宗も成実宗と同様で、その中心となっているものは世親の著した『阿毘達磨俱舎論(あびだつまくしゃろん)』三十巻である。俱舎論では宇宙のあらゆる法を七十五に分かってこれを五種に分類して五位七十五法となしている。それは色法観としては色法十一種をたて五根等について述べ、心法観では心法一、心所有法四十六に分けて人間の種々の煩惱のあらわれ方を細かく説いている。そのほか、非物非心、無為法などをたてて、四諦による迷いの因果、あるいは悟りの因果をあらわし、十二因縁をかかげて惑・業・苦を説明しようとしている。宇宙の一切は法の集合であるから我というものは存在しないというのが俱舎論を貫いている人生観および宇宙観でもある。俱舎宗は教えに劣るものがあつたため、法相、華嚴等が興ってくると、それらの宗に摂せられて十分な発展をとげることができずに、ただ法相宗に付属して進展をみるにすぎなかった。日本の僧では道昭・智通・智達の諸師が玄奘より俱舎宗論を学んだ。行基・玄・義淵等も俱舎論を学んだ。しかし奈良時代においては法相宗の寓宗にすぎず、諸宗の学徒は仏教の初門として学習していたのであった。

1.7 法相宗

弥勒・無着・世親は淨伽行と空思想を基礎として唯識説をたて、一切の万象はいずれも阿頼耶識をはなれては存在しないとする立場をとった。法相宗では菩薩の四十一位を設定して一切衆生が仏となる道をも述べている。法相宗の教学的立場は、五位百法をたてて、有為無為の諸法を分け、根本義に阿頼耶識をおき、一切の法は、この識に蔵する種子より転変したものであると説いて、一切は唯識所変の結果あらわれているのであると理解している。しかし、あくまでも5性各別を捨て切れず、大乘の教法であるといいつつながら、大乘の究極の理法である一乗に徹しきれないところに法相宗が権大乘といわれる所以がある。法相宗を確立したのは、玄奘三蔵の弟子の慈恩大師听基である。慈恩大師は『成唯識論述記』等を著し、法相宗は慧沼あるいは智周により大いに発展することになる。日本への第一伝は道(どう)昭(しょう)による。道昭は653年に入唐、玄奘に学び、帰国してのちは元興寺で教えを広めた。第二伝は智通(ちつう)・智(ち)達(たつ)による。658年入唐して玄奘・窺基に教えを受けた。第三伝は智鸞(ちらん)・智(ち)雄(ゆう)・智(ち)鳳(ほう)らによる。703年入唐して窺基の弟子智(ち)周(しゅう)に学んだ。第四伝は玄坊による。717年入唐し法相を修めて興福寺に伝えた。明治以後、法隆寺・興福寺・薬師寺が法相宗の三本山であったが昭和二十五年法隆寺が離脱して聖徳宗となり、その後清水寺が北法相宗と称し離脱した。

1.8 華嚴宗

華嚴宗は、三論宗、法相宗がそれぞれ論をもととして一宗を中国で設立し論宗と呼ばれるのに対して、『大方広仏華嚴經(だいほうこうぶつけごんきょう)』をよりどころとして宗をたてているために經宗とも名づけられている。華嚴經は正しくは『大方広仏華嚴經』と称され、東晋の仏陀跋陀羅(ぶつだばだら)訳が六〇卷、唐の実叉難陀訳が八〇卷、唐の般若訳が四〇卷と三種の華嚴經が、この宗の中心經典となっている。この宗の中心思想は釈尊の一代の教えを五教十宗に分け、華嚴經をもっともすぐれたものとして、十玄門、六相円融の教義をたて、その宇宙論として、事事無礙の法界縁起を求めて一即一切・一切即一の哲理を展開して万有を説明しようとしているのである。中国における華嚴宗の伝灯(でんとう)は杜順(とじゅん)・智儼(ちごん)・法蔵(ほうぞう)・澄(ちよう)観(かん)、宗密(しゅうみつ)の五祖をたてているが、華嚴宗の大成をみたのは賢首(げんじゅ)大師法蔵である。彼の著書には『華嚴五教章』『華嚴經探玄記』等がある。法蔵(ほうぞう)は立教開宗に際して、さきを開いていた天台宗、三論宗、法相宗の考え方に影響された学風をうちたてたのである。華嚴宗のいう法界(ほっかい)縁起(えんぎ)説はその中心に海印三昧(かいいんざんまい)をおき、この仏の悟りの境地を海にたとえて、海の中の水と波との関係を示すように、仏の一心の法界に宇宙の森羅万象が一時に印現しないものは一つとしてないものであるから華嚴教学の根本原理は一真法界であって、この万有を含めたこの法界では、重(じゅう)重(じゅう)無(む)尽(じん)・円融無礙(えんゆうむげ)であるという立場をとるのである。

2 奈良の寺の年中行事

東大寺の年中行事

2.1 東大寺の論議法要

南都の法要の特色の一つである論議法要は、東大寺では、一般の形式としては、唄(ばい)、散華(さんげ)、講師(こうじ)作法(さほう)、講(こう)問(もん)(講師と問者の作法)、読經の順番で行われる。講問は文字通り問者が本題(その法要が華嚴に関係ある場合は華嚴、三論に関係ある場合は三論)と脇題(広く仏教一般のもの)に分けて、教学上の問題について講師に問いかけ、講師はそれについて答えるというものであるが、もちろん法要であるので形式化したものになっているのはやむをえない。そしてこの講問を法供養とするわけで、いかにも学問寺らしい法要形式である。

2.2 二月堂修二会

これは3月(かつて2月)1日から15日までの間、東大寺二月堂の本尊十一面観音に練行衆(れんぎょうしゅう)が国家安泰・風雨順時・五穀豊穰(ごこくぶによう)を祈願する行法である。11名の練行衆は世の中の罪・穢れを一身に背負い、苦行を實踐して王法を守護し、罪障を消滅させるとともに、その功德によって人々が快適な生活を営むことを祈願するのである。毎年二月に行なわれるところから「修二会」と名付けられ、またこの行法が行なわれる羅索堂(けんさくどう)は「二月堂」と呼ばれるようになった。本尊にお供えする香水(こうずい)を汲み取る行事があることから、

一般に「お水取り」とも呼ばれている。この行法は奈良時代より行なわれてきた六時(ろくじ)行道の形を今に伝え、日中(にっちゅう)・日没(にちもつ)・初夜(しょや)・半夜(はんや)・後夜(ごや)・晨朝(じんじょう)の六時にわたって五体投地(ごたいとうち)・走り・達陀(だつたん)などの激しい所作や礼拝が繰り返される。これは、宗教行事としてはきわめて所作が動的で男性的なものである。また、期間中毎晩行なわれる「お松明(たいまつ)」では練行衆が十本の大松明を二月堂の舞台で豪快に振り回し、奈良の風物詩となっている。『東大寺要録』巻第四、諸院章(嘉承(かじょう)元年<1106>成立)によると、実忠和尚(じっちゅうかしょう)によって天平勝宝(752)に始められた法要が起源とされており、以降今日まで一度も絶やすことなく行なわれている。

2.3 華嚴(けごん)知識(ちしき)供(く)

4月24日華嚴宗独自のものとして、華嚴五十五所の善知識の図を開山堂にかかげて、まず五十五善知識を勧請し、祭文を述べ、華嚴経の講讃をなし、華嚴経の普賢行願品(ふげんぎょうがんばん)を読み、明恵上人作の講式をかかげ、伽陀(かだ)を唱え、終わりに五十五善知識の御名を唱え礼拝し、知識を送るという非常に丁寧な法要である。この法会は鎌倉時代に高山寺(こうざんじ)の明恵(みょうえ)上人によりはじめられたともいわれ、表白(ひょうはく)では、高山寺より快恵法印が東大寺に伝えたのだとも述べている。

2.4 方広会(ほごえ)

12月16日。華嚴宗のなかで研学堅義(りゅうぎ)の形式が完全なかたちで残っているのはこの法会のみである。華嚴教学の属する内明(ないみょう)と因(いん)明(みょう)関係の因明論の論題を組み合わせて、東大寺塔頭(たちゅう)の住職の候補者があったときには三月堂で、それ以外の時は開山堂で良(ろう)弁(べん)僧正の忌辰を期して荘重に行われる。堅者(りっしゃ)が述べる経論の解釈をめぐる、精(せい)義者(ぎしゃ)がこれを詰問し、その判定は探題(たんだい)が下し、この論議に通れば住職となる資格が与えられる。精義者の詰問に困却して泣くように返答する場面を「泣(なき)節(ぶし)」といい、また精義者が難問でせめたてるために「切声(きりごえ)」という節をつかい、ともに後世の謡曲の発生のもとであるといわれている。

興福寺の年中行事

2.5 興福寺と薬師寺の慈恩会(じおんね)

奈良仏教の伝統を今に伝える、法相宗の大会(だいえ)「慈恩会」は中国・唐時代の学僧で法相宗の宗祖、慈(じ)恩(おん)大師(だいし)(632-682)の入滅された正忌日の11月13日に慈恩大師の学徳を偲んで行なわれる。天曆五年(951)興福寺第十四世別当空(こう)晴(じょう)(877-957)の発願によって始められた法会である。空晴は一時衰微した興福寺教学を復興に導いた僧で、門下から有名な弟子を多数輩出している。奈良仏教の伝統的な法要のスタイルとしては、自らの罪を懺悔して国家安穩・五穀豊穰を祈願する悔過(けか)法要と、論議法要との二つが伝えられるが、慈恩会は論議法要の代表的なものの一つである。これは、経典や論書(経の注釈書、研究書)のなかの問題について、問答を重ねながら仏説の真意を明らかにしていこうという研究方法である。慈恩

会はそうした論議あるいは問答を中心にすえた法要で、その最後におこなわれる番論議では、答者(たっしゃ)が問者(もんじゃ)の質問の内容をよく理解できず「今(ま)一度申せ」と問題を何度も聞きなおしながら進められる形式の論議がある。それを重難(じゅうなん)という。二大本山である薬師寺・興福寺が一年ごとに会場(えじょう)となって、両寺の僧侶合同で行なわれる。あたりが完全に暗くなった頃、堂内中央に大師の画像を掲げ、ろうそくの明かりの中厳かに始まる。まず「唄(ばい)」「散華」「梵音」「錫杖」の「四箇(しか)法要(ほうよう)」によって、堂内が荘厳される。僧侶の中で該当者がいる年には「豎(りゅう)義(ぎ)」という資格試験も合わせて行われる。これは法相宗の僧侶として、教義に関する問答が厳格になされる。豎者(りっしゃ)(受験者)は、豎義の受ける前に二十一日間の不眠不臥の前加行(まえけぎょう)の行が課せられ、これも豎義の特徴の一つである。豎者は精進潔斎した別部屋にこもり、豎義で行う問答をすべて暗記しなければならない。まず試験問題に相当する論議の主張命題(所(しよ)立(りゅう))が決まり、節回しや所作が伝授される。本来口答試問であるため伝授などありえないのだが、鎌倉時代になると豎義の形式化がなされ、室町時代になると固定化して現代に及んでいるのである。節回しとは論議文句に抑揚をつけ、あたかも唄うように答弁するものである。節回しには「切り声」「泣き節」といって、厳しい追及に対して返答に窮して泣いているように聞こえる節もある。そのほかに「毎日講」や「大廻り」といった行も合わせて行っていく。こうして21日間の行を経ることで、豎者は心身ともに引き締め、豎義当日を迎えることになる。法隆寺の年中行事

2.6 舍利講(しゃりこう)

聖徳太子が二歳の2月15日、東に向かって「南無仏」と唱えられたとき、その掌中からこぼれ落ちたという「舍利一粒」が法隆寺に伝わっている。この舍利が釈迦の左眼の舍利として信仰され、その舍利を本尊とする法要を「舍利講」と呼ぶ。現在この行事は毎年正月元旦から3日までの三日間のみにかぎって行われている。

2.7 法隆寺お会式(えしき)

毎年3月22日から24日にいたる三日間、聖霊院で行う「聖霊会(しょうりょうえ)」(聖徳太子の遺徳を慶讃供養する法要)を「法隆寺お会式」という。太子の御命日は2月22日であるが、明治末期から一カ月遅らせ、春の彼岸に当たる3月22日に行っている。これは50年毎に行われる聖霊会に対して、毎年小規模に行われ、「小会式」または「略会式」と呼んでいる。聖徳太子讃嘆講式を中心とする管絃講であり、そのときの供物も大変古式なものである。おそらく、その荘厳方法も始行以来の伝統を誇るものと考えられる。唐招提寺の年中行事

2.8 舍利会(しゃりえ) 開山忌

6月5・6日開山宗祖鑑真大和上の御忌法要は、和上の持ってこられた三千粒の仏舍利を奉安して行われるため、舍利会と称される。和上示寂は5月6日であるが、ひと月遅れの6月6日に行われる。この日を中心に前後三日間、御影堂和上像の御厨子を開扉する。東山魁夷氏の御影堂壁障面も併せて公開される。5日朝には藪内流家元による献香・献茶の儀がある。講堂須弥壇上に二基の輿を据え、金亀舍利塔と最勝王経・梵網経を奉安する。5日の御宿忌には菖蒲と蓬(よもぎ)が供花とされ、輿にもかざられる。伽藍の屋根にも菖蒲の葉を葺き、菖蒲湯をたく慣わしである。6日

の供花は白花とともに片葉の葦が供えられる。和上御廟の池に自生する葦は、故郷揚州の方角にのみ葉を伸ばすという言い伝えによる。

2.9 梵網会 (ぼんもうえ) うちわまき

5月18,19日に行なわれる、鎌倉時代の中興の祖・大悲菩薩覚(かく)盛(じょう)上人の御忌日の法儀。梵網経を講讃するので梵網会というが、法要の後、鼓楼の上からハート型のうちわが餅と共に撒き振舞われるため「うちわまき」とも呼ばれる。うちわまきの由来は、安居中のあるとき、講義をされていた師に蚊が群がるのを見かねて弟子の一人が払おうとすると、師は「蚊に血を与えることも菩薩の波(は)羅(ら)蜜(みつ)の行である」と諭され、師の入滅後、受戒の弟子である法華寺の尼僧たちが、その徳をしのんで手作りのうちわをお供えしたことに始まるという。うちわには千手観音・烏須沙摩明王の真言が梵字で刷られ、苗代の虫除けや家内の除災として珍重された。18日夕刻には御宿忌の法要があり、同時にうちわの揮毫物故者の追悼法要が営まれる。19日には梵網経を講讃され、古例により法華寺門跡(もんぜき)がうちわを奉納する。

2.10 釈迦(しゃか)念仏会(ねんぶつえ)

10月21日から23日、舍利会・梵網会とともに三大法会のひとつとして、宗の僧侶すべてが出仕を義務付けられている法要である。建仁三年(1203)解脱上人貞慶(じょうけい)により創始されて以来、歴代長老が唱導継承してきた法会である。かつては旧暦9月19日から26日までの七日七夜、結縁の南都諸寺が参集して、輪番を定めて不断に行われた。現在はひと月遅れの10月に三日間、古式次第の開白・中日・結願にあて、日中・初夜・後夜の三時に修せられる。和上持参の仏舍利と清涼寺式釈迦如来像を本尊とし、法華曼荼羅、律三祖師(高祖南山大師・宗祖鑑真大和上・中国宋代の律宗復興者元照律師)・解脱上人の画像をおまつりする。法要は『法華経如来神力品』に説かれる「南無釈迦牟尼仏」の唱名を主体とする。西大寺の年中行事

2.11 大茶盛式(おおちゃもりしき)

興正菩薩叡尊が、延応元年(1239)の正月、御修法の結願に当たり鎮守八幡宮に参詣して献茶し、その供茶の余服を参詣の人々にふるまったことに始まる由緒ある特異な茶儀である。その日は延応元年1月16日と伝えられ、折からの雪景色をめでながら参集者がお茶を回し飲みした。その後も年々この行事が行われ、西大寺のお正月のお茶を一服いただくと一年間無事息災に過ごせるといふ信仰と、叡尊上人のふるまわれるお茶であるということからこの利益にあずかろうという人々が集まったので、小さな茶碗では間に合わず大茶碗となり、これを「大茶盛」と言うようになったのである。当初は、鎮守八幡宮の社殿を中心に屋外でおこなわれていたこの大茶盛も、江戸時代からはもっぱら愛染堂客殿でおこなわれるようになった。

2.12 光明(こうみょう)真言会(しんごんえ)

文永元年(1264)9月、興正菩薩が、称徳天皇の御忌辰から七日七夜の間、昼夜不断に光明真言土砂加持大法会を始修されたもので、光明真言の功德力により諸々の罪障を消滅して現世に富貴長養の願を満足し、未来には極楽に往生し、三界の万霊もこの利益により得脱できるという真摯な大

法要である。現在は10月3・4・5日の三日間、昼夜不断に勤修されている。

2.13 初午厄除石落神祭(はつうまやくよけしゃくらくじんさい)

石落神祭は、毎年初午の日に厄除祈願として勤修されている。仁治三年(1242)に興正菩薩の御前に一人の老翁が現われて「豊(ほう)心(しん)丹(たん)」の秘薬を授け「我ハ是レ少彦名命石落神也」と言って居なくなった。さっそく石落神の秘薬により施薬院を構えて「豊心丹」をつくるとともに、東門前に社を建てて石落(しゃくらく)神(しん)を祀られたのである。以来、西大寺の守護神として祀られ、また厄除けの神として、石落神祭を初午の日に行っているのである。薬師寺の年中行事

2.14 修正会(しゅしょうえ)

元旦～正月14日

2.15 元三会(がんざんえ)

元旦～3日元三会は顕教的な講問、論釈形式の法要である。釈迦、薬師、弥勒、観音の伽陀の頌を唱誦するのが特徴である。講問論議は東・西座にわかれて行い、論題は『唯識論同学鈔』の中から撰ぶことになっている。ついで読経。般若心経、法華経寿量品自我偈(じがげ)、唯識三十頌、回向文を読む。修正会は顕教の勧学増進のために行われる法要であり、修正会の本尊は吉祥天画像である。

2.16 修二会(しゅにえ) 花(はな)会式(えしき)

3月30日～4月5日薬師如来を本尊として薬師悔過を七日七夜の間、初夜、半夜、後夜、晨朝、日中、日没の六時に金堂において行法が行われる。この法会は天平十六年(744)に始められた。勧学増進の顕教的な経釈の法会の次第に対して、祈祷祈願による密教的な法会の次第が織り込まれている。薬師如来に国家の安泰を五穀豊穰・万民豊樂を祈る法要が施行され、古くは修二会と呼ばれていたが、堀河天皇の嘉承二年(1107)、皇后が病気にかかられたのでこの寺に病氣平癒のために薬師悔過を七日間祈願したところ、薬師如来の靈験がたちまち現れて、まもなく快復された。天皇・皇后は喜び、宮中の采女たちに造花十種をつくらせ献花され、それを堂内に十二の花瓶に分けて飾った。それ以来、毎年2月3日に献花の法要が行われてきたが、元禄年間に古来の修二会に供える造花が発達したため「花会式」と呼ばれるようになり、現在のように4月に行うようになった。花は梅・桃・桜・藤・椿・百合・かきつばた・山吹・牡丹・菊の十種の造花であり、もとは、絹を材料にしていたが、今は紙を用いている。これを十二瓶に活けるのは、十二か月になぞられたもので、農耕儀礼として十二か月祝いや十二か月花づくしにあたるものであろうといわれている。なお、昔この花は、寺領の四カ郷から選ばれた莊厳頭が作ったが、後に寺内で作るようになった。3月30日の初夜より始まり、4月5日の結願初夜には神(じん)供(ぐ)、鬼追い式などが加わって終了する。行法は、声明のリード役として一時一回の薬師悔過の導師を勤める僧(時導師)が本尊正面に向かい供養文が唱えられ行法が始まる。薬師如来の十二の大願等が唱えられる称名悔過では、僧は一句ごとに柄香炉(えごろ)を持ち身体を反らし、句末で頭を地につける礼拝(五体投地)を

なし、他の僧たちも座ったまま大きく反り返り唱え、時導師より一小節ずつずらして唱えるために二重奏になって聞こえる。しかし近年では聴聞者たちも大声で唱えるため堂内は大合唱となり聴聞者との一体感が堂内に満ち溢れる。また、本尊の法力をもって悪行を除き、仏法擁護・衆生利益を願うために薬師如来の真言百八回を心中で唱える如法念誦が行われる。

参考文献

- [1] 平岡定海編『日本仏教基礎講座 第一巻 奈良仏教』雄山閣 1980
- [2] 速水侑編『論集日本仏教史 第二巻 奈良時代』雄山閣 1986
- [3] 速水侑編『論集 奈良仏教 第一巻 奈良仏教の展開』雄山閣 1994
- [4] 中村元編著『仏教行事散策』東書選書 1989

朝倉書店『仏教の事典』 南都仏教 より 285-295